

エジプト駐在武官

日誌(14)

エジプトに魅せられて(最終稿)

榊枝 宗男 陸自75

2011年1月「アラブ世界が燃えている」とアルジャジーラのテレビ放送が衝撃的にチュニジアにおける国民蜂起を伝え、その影響がリビア、シリア、イエメン、エジプトへ及んだ。

そのエジプトで、一時はムスリム同胞団出身のモルシ大統領が就任したが、2年後には前大統領のムバラクと同じようにデモ隊と軍部の力によって



エジプト国防軍訪問2009年 撮影

政権の座を追われた。エジプト軍トップのシーシー国防相が混乱回避を理由に、即時憲法停止を宣言し、前大統領の身柄を拘束して暫定政権を樹立した。まさに軍部による無血クーデターであったと言えよう。

では何故、リビアや今もなお内戦が続くシリアのように、無辜の民を流血の内戦へ巻き込まなかったのか。理由は、どのようなことであろうか。また、モルシ支持派のムスリム同胞団の反発は依然として強く、エジプト国内各派の対立が続いているが、シーシー政権は2期目を迎えて民主化へ向け歩み出している。そのカギは軍部とイスラム勢力、そして西欧民主主義を志向する勢力(リベラルな世俗派)の動向いかにかかっている。

ただし、わが国ではエジプト国防軍についての報道は少なく、実態が掴めない状況にあることが残念である。エジプトの一般国民から見た軍は、ある種「国民教育の場」としての役割を負い、また、1979年の第4次中東戦争で常勝のイスラエル軍を奇襲して自国領シナイ半島を奪還する大勲功をたてた。アラブ諸國中、対イスラエル戦争では唯一の戦勝国として、国民へアラブの盟主、大国としての高いプライドを与えている。

本稿への投稿を終了するが、在動中にカイロ郊外の砂漠に駐屯する精鋭空挺師団を、防大の学生10名を引率して訪問された偕行編集委員の喜田先輩に、投稿の機会を頂いたことに深く感謝いたします。

最後に、この中東地域は、まさに戦争と平和、豊かさと貧しさ、誇りと屈辱、古代と現代、テロとゲリラ、人間と神、宗教と科学が共存し、混在し、融合し、対立する、複雑多様な地域である。

石油とその地政学的重要性ゆえ、かつては旧東西勢力バランスを左右し、日本及び欧米にとっても経済安全保障のバイタルエリアであったが、これからどういようように変容するか、余生の一時をもつて現地においてしばらく注視して行きたいと思う。

編集委員・喜田 14回にわたる「駐在武官日誌」のご投稿、ありがとうございます。26年も前、防大の学生と一緒にエジプトを訪問し、榊枝武官のお宅にお邪魔させていただきました。ナイル・ヒルトンに宿泊した翌日ですが、予防薬の効果なく全員が下痢状態。着任直後の榊枝家の冷蔵庫にエビアンボトルがぎっしり詰まっているのを見て驚きました。「家族全員の身体が慣れるまでは、菌磨きもミネラルウォーターです」と教わり、ご家族伴つての

武官勤務のご苦労を思い知らされたものです。今回、エジプトから見た中東情勢を執筆していただきましたが、ご勤務を通じて得られた知見を基に、アラブの石油問題、イスラム社会、宗教対立、大国の関与等を、折に触れて解説していただきたいと思えます。お子様たちも大きくなれば、独立されたことでしょう。



皆様のご健勝をお祈りいたします。読者に代わりまして、厚く御礼申し上げます。